#聖アングレカム学院で心惹かれ、気に入ったものは数え切れないほどにある。

圣彗星兰学院吸引着我，我喜爱着其中数不尽的许多事物。

#古い映画に出てくるような煉瓦作りの学舎、静かにひっそりと佇む聖堂。学院を包む、どこまでも続く青青とした森。風に摇れ、咲き乱れる花たち。数え上げたら切りがないほどの、様々な好きなものたちの中で——特に私が気に入っているものがふたつある。

和老电影里面一样用红砖瓦砌成的校舍、静静地矗立着的圣堂。包围着学校的青翠而广袤的森林。盛放的繁花随轻风摇曳。在这些我所喜爱的数不胜数的事物之中——更有两个让我特别中意。

#そのひとつが、今、私が執務机に座り“係”をしている図書室だ。

其中之一，就是这个，现在由我坐在办公桌前担任管理员的这个图书馆。

#初めて目にした時は、自分の理想としていた図書室が、目の前に広がっていることに胸が詰まり、感動で打ち震えたほどだった。図書委員となり、放課後のほとんどを此処で過ごしている今も、その感動は変わらない。そして、もうひとつは——

从看到的第一眼开始，就觉得这就是我理想中的图书馆。眼前陈列的丰厚馆藏让我心里充满感动。即使是成为图书委员之后，每天放学后都要在此处度过，这份感动也从未改变。而另一个则是——

#「——今曰もお前が図書委員をやっているんだな」

“——今天又是你来当图书委员啊”

#キィキィと蝙蝠の鳴くような車輪の音をさせながら、話し掛けてくれる彼女。

随着嘎啦嘎啦蝙蝠的叫声一样的车轮声，向我搭话的来者。

#「他の先輩方は部活動があるから、代われる時は私が代わっているの」

“其他前辈们都有社团活动，腾不出时间就让我来代班了”

#——そう、ふたつ目は、最近知り合った八重垣えりかさんとの語らいの時間だ。

——是的，第二个，就是和最近才认识的八重垣艾莉卡同学聊天的时间。

#「……それにしても、いつ来ても利用者がいないよな。この学院の連中は図書室があるってことを知らないのかね？」

“……话说回来，每次来的时候都没有别的人呢。学院里的其他学生是不知道学院还有个图书馆吗？”

#「きっと部活で忙しいのよ。クラスメイトから聞いたのだけど、大体の人が部に所属するって聞いたわ」

“一定是社团活动太忙了吧。从同学们那里听说，大家基本都加入了社团”

#私の言葉にへぇと首を竦めると、「それじゃわたしは少数派の方なんだな」と首って、車椅子を執務机の隣へと着けた。そして、いつものように私が読んでいる本を見遣る。

她听到我的话，缩缩脖子，一边说着“这么看来我成了少数派呐”，一边摇起轮椅来到办公桌边。然后像平时一样看了看我正在读的书。

#「今日は——『雨月物語』か。お前もそっち系の本を読むんだな」

“今天是——『雨月物語』啊。你也会读这种书呢”

#「そっち系って？」

“这种书？”

#「見た目からして純文とか恋愛小説とか、そういう本ばかり読むもんだと思っていてね。『雨月物語』って怪異小説だろ？」

“你不总是在读那种单看名字只会以为是严肃文学或者恋爱小说的书嘛。但『雨月物語』是志怪小说吧”

#「怪異小説つて面白いわよね！」

“志怪小说也一样有趣得很哟！”

#「お、おお......」何故だか少し引き気味だったえりかさんだったけど、

“啊，是吗……”艾莉卡似乎有些意外，

#「『雨月物語』の中で何が好きだ？わたしは吉備津の釜が好きでね。贔屓にしてる作家モチーフにして短編を書いてるんだ」と、猫の笑みを零しながら尋ねた。

“那你喜欢『雨月物語』里的哪一篇？我很喜欢吉备津的锅这一篇。而且我喜欢的作家还用这个主题写过一个短篇。”艾莉卡一边问着我一边露出了猫一样的黠笑。

#「私も好きよ。考えさせる結びで、話が終わった後を考えさせてくれる小説が好きなの」

“那一篇我也喜欢。是个能让人回味的结局，我喜欢会让我想象故事结束之后还会发生什么的小说。”

#「だよな！人によっちゃラストがハッビーエンドでメじゃないと、それだけでクサすやつもいるしなあ」

“对吧！但也有只要结局大团圆就好，只看结局就肆意评判的人啊”

#そう言って、少年のような笑みを見せてくれた。私の大好きな、語らいの一時。

艾莉卡说完，朝我露出了少年一样的笑容。我真的很喜欢闲聊的这段时间。

#話は二人の共通の趣味である図書から映画へと変わり——……

话题从两个人都感兴趣的书籍变成了电影——……

#「——小説とは違って、本当に好きな映画は繰り返し観ないことにしてる」

“——和小说不同，即使是很喜欢的电影我也不会来来回回看”

#「どうして？勿体ないわ」

“为什么？很可惜哦”

#「歳を経ると色々な見方に変わるからってんだろ？でも、もう一度見て、あれ？こんなものだっけって思いたくない。その時に感じた想いを……胸の裡の大切な宝物として、とっておきたい」——そういう考え方もあるのか。素敵な考え方だわと伝えた。

“随着年龄增长，人的见识、想法都会改变对吧？所以，我不想在再次看电影的时候产生‘这是啥？当初我看的是这个吗？‘的想法。我只想把第一次看完的时候的感触……作为最重要的宝物，珍藏在心里”

#「......別に褒められることでもないだろ」

“……这并不是什么特别值得称道的事吧”

#えりかさんは、夕映えに染まったかのように頰を赤くすると、私へと乗り出していた身体を離してしまう。懐いていた猫が、そっぽを向いてしまったような寂しさを感じた。

艾莉卡的脸颊仿佛是被夕阳染过一样变成了带上了绯色，把倚靠在我身边的身体迅速抽离。我不禁感觉到一阵像是怀里的小猫跑向了别处的寂寥。

#私はそうだわ、と用意しておいたものを鞄から取り出す。可愛い模様の紙袋を前に、まだ黑猫は警戒を弛めない——「そいつは？」

于是我把用于应对这一刻的东西从包里拿了出来。看着可爱的纸袋，黑猫依然没有放送警惕——“这是什么？”

#「クッキーよ。体驗入部のときに作ったの。八重垣さんに食べて貰いたくて頑張ったの」

“饼干哟。入部体验的时候做的。想着要做给八重垣同学吃，就充满干劲地做出来了”

#わたしのために？と呟き、ようやく引いた体を戻してくれる。

艾莉卡嘟囔着“是给我的？”，终于又凑了回来。

#私はリボンで閉じていた袋をあけ、クッキーを摘み、えりかさんへと差し出した。

我把用蝴蝶结扎住的袋口打开，拿出一块饼干递向了艾莉卡。

#「......まあ、くれるって言うなら貰うけどよ」と彼女は言って、何やら意地の惡い猫の笑みを浮かべると、私が手に持ったクッキーをあっという間に囓り、頰張った。

“……啊呀，那我就恭敬不如从命了”艾莉卡脸上又挂起了看不出居心的猫之黠笑，然后一下我手上叼走饼干，整个吞进嘴里囫囵地鼓着嘴嚼了起来。

#「んっ......んむ。クッキーの表面を卵黄で塗った昔ながらのやつか。好きな味だ」

“唔……唔嗯。这次和平时一样在饼干上涂了蛋液吗。是我喜欢的味道”

#「そ、そう、ありがとう......」手ずから与えたことに、思わずドギマギする。

“是，是吗，谢谢……”想到这饼干相当于亲手喂给了艾莉卡，我就不由地有点心跳加速。

#えりかさんはそんな私を笑い、ようやく冗談でやったのだと分かった。顔に出ていたのだろうか、悪いと呟くえりかさんへ、私も悪戯心が湧いた。

艾莉卡看着我这样子笑了起来，我终于反应过来她在开我的玩笑。大概是脸红的样子被她看出来了，我小声责怪着她坏心眼，也想要捉弄她一下。

#「それじゃ、今度は八重垣さんが私へ食べさせて」

“那，这回我要八重垣同学喂我”

#しかし、彼女は事もなげに紙袋からクッキーを取り、私へ差し出す。自分から言ったのに、いざ食ベようとすると彼女へ顔を近づけること、唇を開く仕草が恥ずかしくなり——

然而，她却若无其事地纸袋里拿出饼干，把手朝我伸了过来。明明是自己说的话，如今要是想吃饼干还要主动朝她靠过去，反而感觉不好意思张嘴——

#「あっ」——誤ってクッキーを持つ、彼女の指に唇が触れてしまった。指の感触が唇へと伝わり、瞬間かっと全身が熱く火照る。ごめんなさい、と顔を上げると其処には——

“啊！”——一不小心，我的嘴唇碰到了艾莉卡拿着饼干的手。从唇上感受到她的指尖的时候，全身一下子像着了火一样热了起来。一边说着对不起，一边抬起头发现——

#「————ッ」——私と同じく、いやそれ以上かもしれないほどに顔を染め、目を潤ませた彼女がいた。驚き、口ごもっていると「——今日はもう戻る」

“——！”——艾莉卡也和我一样，她的脸甚至比我还红，眼眶也有些湿润。她惊讶着，含糊地挤出几个字“——今天我就回去了”

#蝙蝠が鳴く音を響かせ、図書室から出て行ってしまった。初めは後悔の念が。でも、彼女が言った“今日は”という言葉に、ほっと安堵の息を吐く。きっと、明日も来てくれる。次はどういう料理を用意しようか？そう明日の一時を想った。

伴随着蝙蝠一样的车轮声，艾莉卡离开了图书馆。一开始满心都是后悔。但是，我想着她说的“今天就”这句话，又轻轻松了口气。明天她一定还会来的。又要准备什么点心呢？我就这样期待着明天。